

どんなところ？ぼくのまち

No. 41 入間市の焼物（1）

ひがしかねこかまあとくん
東金子窯跡群

①歴史的な背景



いるましりつとしょかん
—入間市立図書館—
きょうりょく いるまはくぶつかん
協力・入間市博物館

いるまし ちいき やきもの
入間市の地域で焼物がつくられていたのは、
せいぎ なか せいぎ ころ
8世紀の半ばから10世紀にかけての頃のことです。

いまから、
やく1000ねんいじょう
まへの
こと
でした!

そのころ(奈良時代)は、仏教の文化が花開いた時期でした。けれども皇族や貴族の争いや疫病の流行などで世の中は乱れていたため、聖武天皇は仏教の力で国を守ることを願い、天平13年(741年)、日本各地の国ごとにそれぞれ「国分寺」を建てるように命じました。(『国分寺建立の詔』)

そのころ中央政府(朝廷)は、日本全国をくまなく治めるために、日本の国を68の小さな国に分けました。そこには、それぞれ「国司」という役人が中央から派遣され、「国府」には中央政府の出先機関が置かれました。

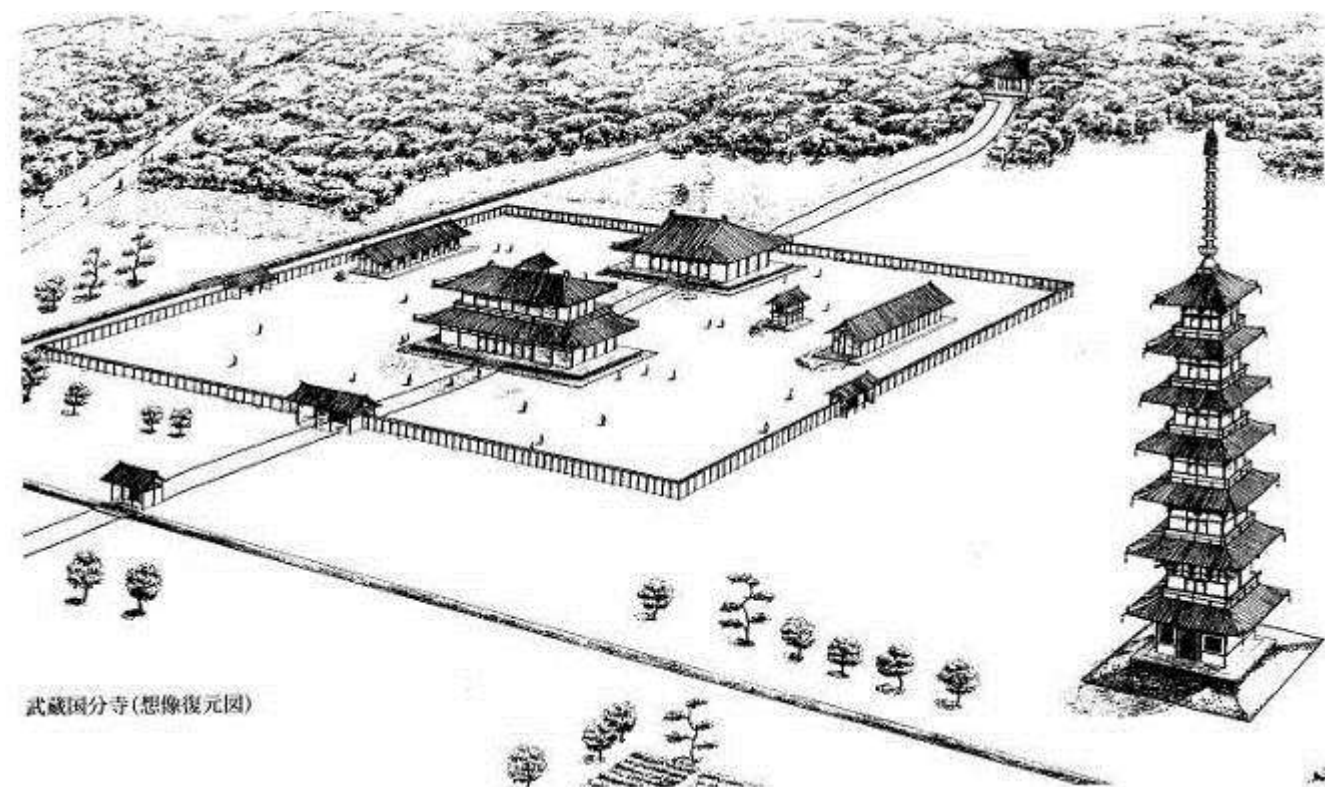
こうして建設が始まったのが、今も各地にその跡が残る「国分寺」です。
それらの各地の国分寺をまとめる「総国分寺」が『奈良の大仏』で有名な東大寺です。



この聖武天皇の命令により、武蔵の国(主に現在の東京都と埼玉県)では、現在の東京都国分寺の場所に国分寺(国分僧寺と国分尼寺)が建てられました。



いまは、もう残っていません。



武蔵国分寺(想像復元図)

いるまはくぶつかん しょうせつてんじすろく
「入間市博物館 常設展示図録」より

武蔵の国の国分寺は、主な建物が完成したのが「詔」から16年後の757年ごろ、すべてが完成したのは766年ごろであったと言われています。

これらの建物の屋根を葺くのに使われた瓦は約50万枚といわれ、そのための瓦を焼いた窯場の一つが入間市内に残る「東金子窯跡群」です。

また、それから約70年後の承和2年(835年)、武蔵の国の国分寺の七重の塔は落雷により焼失してしまいましたが、その10年後の承和12年(845年)、男衾郡(現在の埼玉県大里郡の一部)に住む、壬生吉志福正という人が、七重の塔の再建を願い出て許可されました。

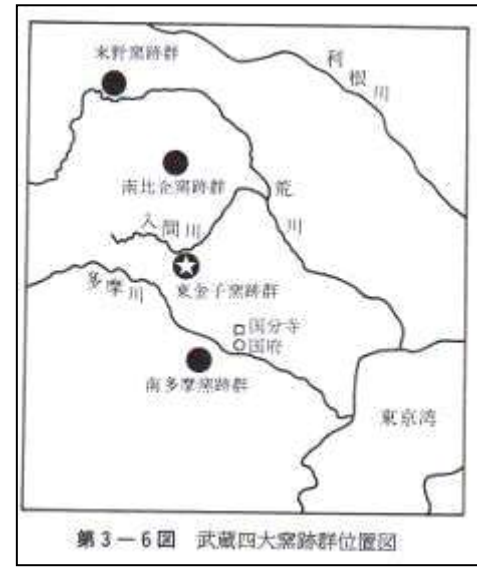
この、塔の再建の時に使われた瓦も、東金子窯跡群でつくられたようです。

武蔵4大窯跡群

武蔵の国の国分寺の建設のときに使われた瓦を焼いた窯場として、次の4か所が知られています。

- ・「南多摩窯跡群」(八王子市周辺)
- ・「東金子窯跡群」(入間市)
- ・「南比企窯跡群」(比企郡鳩山町周辺)
- ・「末野窯跡群」(大里郡寄居町周辺)

これら4か所を「武蔵国4大窯跡群」と呼んでいます。



第3-6図 武蔵四大窯跡群位置図

「入間市史・通史編」より

なぜ国分寺で使われた瓦が「東金子窯跡群」でつくられたとわかるのでしょうか？



国分寺のあとと「東金子窯跡群」の遺跡との両方から、同じ模様の瓦が見つっているからです。

武蔵4大窯跡群からは、そのころの武蔵の国のなかにあった20の郡の名前や人の名前などの文字が書かれた瓦がたくさん見つかります。

そのうち「窯跡東金子群」と「南比企窯跡群」からは18の郡名の瓦が見つかり、この2つの窯跡が国分寺の建設に大きな役割を果たしたことが伺えます。

四大窯跡群出土郡名瓦一覧

郡名	秩父	児玉	賀美	那珂	榛沢	幡羅	男衾	大里	比企	横見	足立	埼玉	埼玉	高麗	入間	豊島	多摩	都筑	橋本	荏原	久良岐	
東金子	○	○	○	○	○	○	○	○							○	○	○	○	○	○	○	○
南比企	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
南多摩	○	○	○	○				○	○							○	○	○	○			○
末野	○				○	○	○															○

そのころの入間市域のようすは…？

入間市では、「縄文時代」の遺跡は見つっていますが、「弥生時代」・「古墳時代」の遺跡は今のところ見つかりません。これは縄文時代に植物などの採集や狩(魚)をして暮らしていた人々が、弥生時代になって稲作を始めると、それに適した水の豊富な低い土地へと移り住んでいったためと考えられます。そして次に入間市の地域に人が住んでいたことを教えてくれる遺跡が「東金子窯跡群」です。

これは8世紀から10世紀にかけて使われていた、加治丘陵の斜面に残る「登り窯」などの跡で、「瓦」や「須恵器」が焼かれていました。これにより、この頃までに入間市の地域に再び人が住み始めていたということが分かります。

これらの郡の名前を示す文字の付いた瓦は、郡内に瓦を焼くような窯場を持たない郡の人たちから依頼を受けて、東金子窯跡群で焼かれたものと思われます。



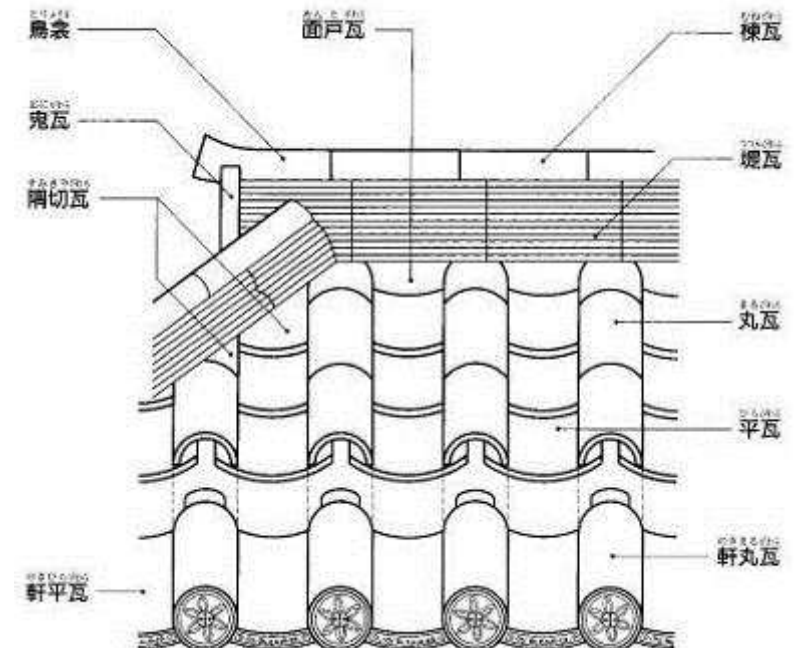
「入間」の文字のある瓦

これらは「新久窯跡」から見つかったものです。

「武蔵新久窯跡」より

瓦の名称

瓦の名称



「入間市博物館常設展示図録」より

東金子窯跡群からは、平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦など、たくさんの瓦が見つかりましたが、このように使われていました。

どんなところ？ぼくのまち

No. 42 入間市の焼物（2）

ひがしかねこかまあとくん
東金子窯跡群

②東金子窯跡群とは？



いるましりつとしょかん
—入間市立図書館—
きょうりょく いるまはくぶつかん
協力・入間市博物館



東金子窯跡群とは？



入間市内の新久・小谷田・仏子地区にあたる、加治丘陵の南側と北側の地域にたくさん残されている「須臾器」や「瓦」を焼いた「窯」の跡のことで

これまで、

新久窯跡、前内出窯跡、八坂前窯跡、水排・柿ノ木窯跡、

谷久保窯跡、広町窯跡、上広瀬窯跡、谷津窯跡、

根岸窯跡、入戸窯跡、北真込谷窯跡、

蓬谷遺跡（一部窯跡含む）、霞沢窯跡、

鞍掛窯跡、源氏峯窯跡、八津池窯跡

などがみつかっています。



これらの「東金子窯跡群」は昭和44年（1969）に埼玉県「選定重要遺跡」に指定されています。



「登り窯」を使って焼物を作る技術はそのころの最先端技術！！

どうしてそれがこの入間の地に！？



理由・その1

「登り窯」をつくるための条件がそろっていた。

- ①登り窯をつくるための急な斜面がある。
- ②焼物の原料となる質の良い粘土がとれる。
- ③焼物を焼くときに使うたくさん薪がすぐに手に入る。

加治丘陵は、これらの条件がすべて揃っていました。

理由・その2

そのころの朝鮮半島の進んだ文化や技術に付けていた人たちがこの近くに住んでいた。当時、戦乱の続いていた朝鮮半島を逃れて日本にやってきた人々がいました。716年、朝廷は関東周辺に住んでいたそれらの渡来人を集めて、新しく「高麗郡」をつくるように命じました。この「高麗郡」がつくられたのが現在の日高市・飯能市を中心とした地域であるといわれています。

これらの渡来人の技術が東金子窯跡群の窯場でも使われていたと思われます。

「のぼりがま(登り窯)」とは？

須臾器や瓦などを焼くときに、丘陵や台地などの斜面につくった「かま」で、5世紀のはじめごろ日本に伝えられました。「焚き口」と「煙たし」がつけられ、それ以外のところはトンネルのような形になっています。1100℃ぐらいの高い温度でやきものをつくることができました。

東金子かまあと群のころの「のぼりがま」には「地下式」（地面をほりさげて地下にトンネルをつくる方法）と「半地下式」（半分は地面をほりさげ、半分は地上にトンネルをつくる方法）の2つの種類があります。

参考①「古代史復元④」
参考②「文科財を探る 科学の眼②」

ひがしかねこまあとぐん ねんびょう
東金子窯跡群 年表

ひがしかねこ ぐん ぶんぶす
東金子かまあと群 分布図



ひがしかねこまあとぐん とくちょう
東金子窯跡群の特徴

「東金子窯跡群」からは地名などの文字が書かれている瓦や硯などが見つかっています。その都から遠く離れた地方では、文字は役所や寺などの限られた所でしか使われていませんでした。

このことから「東金子窯跡群」で作られた製品の主な送り先は、役所や寺などであったと思われます。

そのため、国分寺の建設のために生産をはじめ、発展していった「東金子窯跡群」も、寺の建設が終わりその目的が果たされるとだんだん衰退していき、10世紀になるとほとんど窯が使われることはなくなってしまったようです。



ねんだい 年代	しゃかい うご 社会の動き	ひがしかねこまあとぐん 東金子窯跡群のようす
8世紀	741年 「国分寺建立の詔」が聖武天皇により出される。 (武蔵の国では、現在の東京都国分寺市に建設が始まる。)	「水排・柿ノ木窯跡」で国分寺建設のための瓦の生産が始まる。 国分寺が完成して瓦がいらなくなると生活用品である「須恵器」の生産中心の窯が開かれる。 (小型の物を作るので、「登り窯」としては小さめ。水を求めやすい加治丘陵の北側(仏子側)に「前内出窯跡」などがつくられる。)
9世紀	835年 武蔵の国の国分寺の七重の塔が雷により焼失。	塔の再建のために必要な瓦が、国分寺まで運ぶのに便利な加治丘陵の南側(東金子側)の斜面で本格的につくられるようになる。 (「八坂前窯跡」、「新久窯跡」など。)
10世紀	845年 壬生吉志福生という人が、焼けてしまった七重の塔の再建を願い出て許可される。	やがて、七重の塔が完成すると、東金子窯跡群での焼物の生産はほとんど行われなくなっていく。

※ 参考資料は、No.43にまとめて載せます。



どんなところ？ぼくのまち

No. 43 入間市の焼物（3）

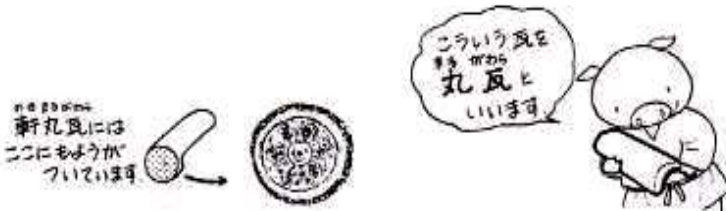
いるまし やきもの

ひがしかねこかまあとぐん

東金子窯跡群

いるましりつとしょかん
—入間市立図書館—
きょうりよく いるましはくぶつかん
協力・入間市博物館

③主な窯跡のようす（『入間市の遺跡』より）



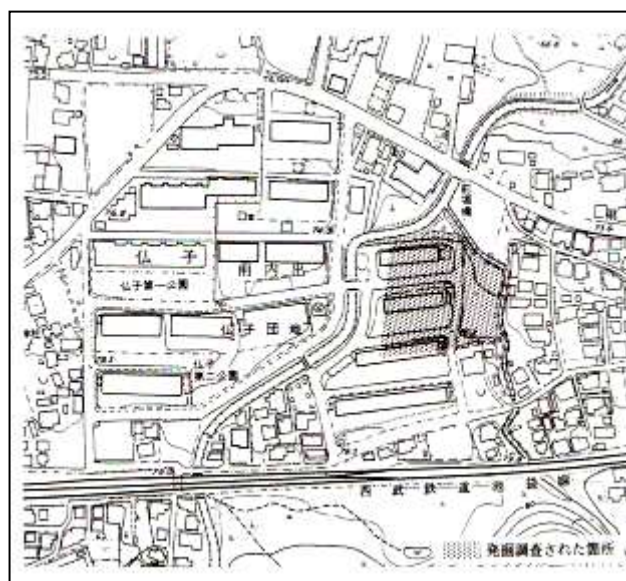
1. 前内出窯跡

まえうちでかまあと

- 場所 仏子字前内出
- 奈良時代生産遺跡（窯跡）
- 昭和47年 発掘調査

【発見されたもの】

- 北斜面に2基の「登り窯」
- 東斜面に2基の「窯」
- たくさんの須恵器（坏や埴）
- 瓦が少し



↑「入間市の遺跡」より

出てきた須恵器から、この窯は8世紀に使われていたと考えられています。

2つの「登り窯」は小さめ（全長5メートル以下）で出土品も小さなものが多く、生活用品である須恵器をつくっていたものと思われる。

やがて七重の塔の再建が始まり瓦の需要が増えると、もっと大きな「登り窯」が瓦の運搬に便利な加治丘陵の南側に新しく作られ、窯業の中心はそちらに移っていったようです。

2. 八坂前窯跡

やさかまえかまあと

- 場所 大字新久字八坂前
- 奈良・平安時代生産遺跡（窯跡）
- 昭和40年、55年、62～63年 発掘調査



【発見されたもの】

- 40年…3基の「登り窯」
- 55年…3基の「登り窯」 粘土をとった穴の跡
- 62年…2基の「登り窯」

全部で8基の窯跡が見つかりました。
いずれも丘陵の斜面を利用して「窯」をつくる「登り窯」です。

- たくさんの瓦（平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦など）
- たくさんの須恵器（坏・埴・壺・甕など）
- 獸脚付香炉

香炉の脚の部分が動物の足の形をしているもので、
9世紀の出土品としてはたいへん貴重なもの



↑「入間市博物館常設展示図録」より

- 陶器でできた硯（陶硯）

出てきた瓦や須恵器から「窯」が使われていた時期を3つに分けることができます。

第1期…須恵器づくりを目的として4基の「窯」がつくられる。

第2期…（国分寺七重の塔の再建の頃）

瓦づくりが始まると新しい「窯」がつくられ、8基の「窯」すべてで瓦の生産が行われるようになる。

第3期…瓦の需要がなくなったため、3基の「窯」は使われなくなり、残された「窯」で須恵器をつくっていた。

※昭和55年に発掘調査された部分（公園の南側）は、現在保存されています。

あらかまあと
3. 新久窯跡

- ばしょ いるましあらく
・場所 入間市新久
- なら へいあんじだいせいざんいせき かまあと
・奈良、平安時代生産遺跡（窯跡）
- しょうわ ねん ねんはつかつちょうさ
・昭和38年、44年発掘調査

はっけん
【発見されたもの】
<A・B・C・D地点>

- き のぼ がま
・6基の「登り窯」
- こうぼう あと じゅうきよあと けん
・工房の跡とみられる住居跡が1軒

<E・F地点>

- き かま
・1基の「窯」
- かわら しゅうせきじょう あと おも
・瓦の集積場の跡と思われるもの
- けん じゅうきよあと
・2軒の住居跡
- かわら のきまるがわら のきひらがわら まるがわら ひらがわら
・瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦など）
- すえき
・須恵器
- とうき すすり とうけん
・陶器でできた硯（陶硯）



あらかまあと やさかまえかまあと ひがしかねこかまあとぐん ちゅうしん かまあと
新久窯跡は、八坂前窯跡とともに東金子窯跡群の中心となる窯跡です。

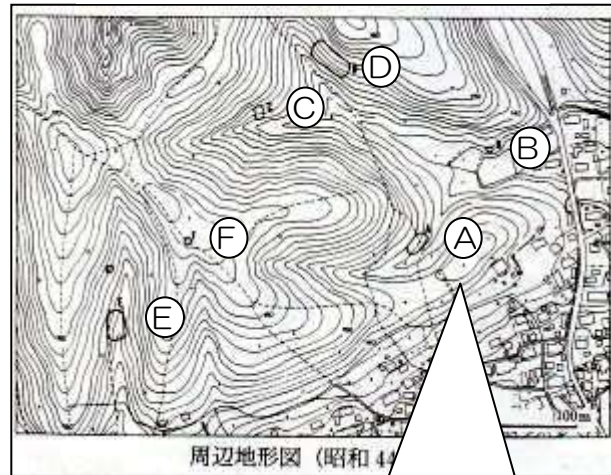
かまあと み かわら おな かわら むさし くに こくぶんじあと み
この窯跡で見つかった瓦と同じ瓦が、武蔵の国の国分寺跡からも見つかっています。

このことから、ここで作られた瓦が国分寺に使われたことが分かります。また国分寺の
とう あと とく おお み ねん さいけん きよか しちじゅう とう つか
塔の跡から特に多く見つかったので、845年に再建が許可された七重の塔に使われ
た瓦が新久窯跡で作られたものと考えられます。

これらのことから、この「登り窯」が使われていた時期を9世紀中頃と決めることができ
ます。

げんざい のぼ がま き ちす ちてん かまあとこうえん ほそん しょうわ ねん
現在、この「登り窯」2基（地図のA地点）は「窯跡公園」として保存され、昭和53年
(1978)「入間市の指定文化財（史跡）」に指定されています。

いるまし いせき
「入間市の遺跡」より



げんざい
現在は、ここに
いるまだいだんち ぞうせい
入間台団地が造成されています。
(A地点 → かまあと公園)

ここから見つかった瓦や須恵器には、
もじ か おお とく
文字が書かれているものが多く、特に
いるま いるま いみ いし
「入間」とか入間を意味する「伊」の字
か かが書かれているものも見つかっていま
す。「伊利麻」の「伊」だよ！



はじき すえき
「土師器」と「須恵器」とは？



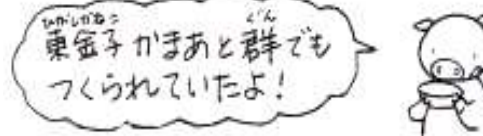
このころの土器には、弥生土器の流れをくむ「土師器」と朝鮮半島の技術の流れをくむ
「須恵器」の2種類があります。

はじき
土師器

こぶんじだい へいあんじだい あいだ
古墳時代から平安時代の間（3
～12世紀頃）使われていた
すえき とき
素焼きの土器。
800～900℃ぐらいの温度
で作られ、赤みがかった茶色を
している。

すえき
須恵器

5世紀の中ごろに朝鮮半島から伝わった
ぎじゆつ や とき あお はいいろ
技術で焼かれた土器。青みがかった灰色を
して、1100℃ぐらいの高い温度で
つくられるため、堅く焼き締まっている。
①ろくろを使って形づくられている。
②高い温度で焼かなくてはならないので
「登り窯」を使って焼かれている。
という、2つの大きな特徴があります。



さんこう しりょう ころ
<参考にした資料（41・42・43号）>

いるまし げんし こだいしりょうへん つうしへん みるそく ぶんかざいへん
「入間市史」（原始・古代資料編）（通史編）（民俗・文化財編）

いるまし いせき いるましはくぶつかんじょうせつてんじすろく いるまし していぶんかざいあんない いるまし やさかまえかまあと
「入間市の遺跡」 「入間市博物館常設展示図録」 「入間市の指定文化財案内」「入間市八坂前窯跡」

やさかまえかまあと だい じちょうさ いるまし ぶんかざいだい しゅう いるましぶんかざいほごしんぎいんかい へん
「八坂前窯跡 第3次調査」 「入間市の文化財第5集」（入間市文化財保護審議委員会（編））

むさしあらかまあと さかすめひでいち へん ゆうざんかく さいたまけんりつはくぶつかんてんじかいせつ れきし さいたまけんりつはくぶつかん へん かん
「武蔵新久窯跡」（坂詰秀一（編）雄山閣）「埼玉県立博物館展示解説・歴史1」（埼玉県立博物館（編）刊）

すせつさいたまけん れきし おのふみお せきにんへんしゅう かわでしよほうしんしゃ
「図説埼玉県の歴史」（小野文雄（責任編集）河出書房新社）

こだい しふくげん こだい みやこ むら かねこひろゆき へん こうだんしゃ
「古代史復元⑨古代の都と村」（金子裕之（編）講談社）

ぶんかざい さく かがく め せつき とき そうしよくひん さく ひらおよしみつ やまざしりょうじ へん こくどしゃ
「文化財を探る科学の眼②石器・土器・装飾品を探る」（平尾良光・山岸良二（編）国土社）

にほんれきしだんけん こだい ほんくつ こくりつれきしみるそくはくぶつかん へん ぶくだけしよてん
「日本歴史探検①古代を発掘する」（国立歴史民俗博物館（編）福武書店）

こだいししよごじてん たけみつこと へん しんじんぶつおうらいしゃ
「古代史用語事典」（武光誠（編）新人物往来社）

がくしゅう やくだ きょうかしよごじてん しゃかいが かわかみちかたか せきにんへんしゅう がくしゅうけんきゅうしゃ
「学習に役立つ教科書用語事典 社会科④」（川上親孝（責任編集）学習研究社）

どんなところ？ぼくのまち

No. 44 入間市立図書館のあゆみ(1)

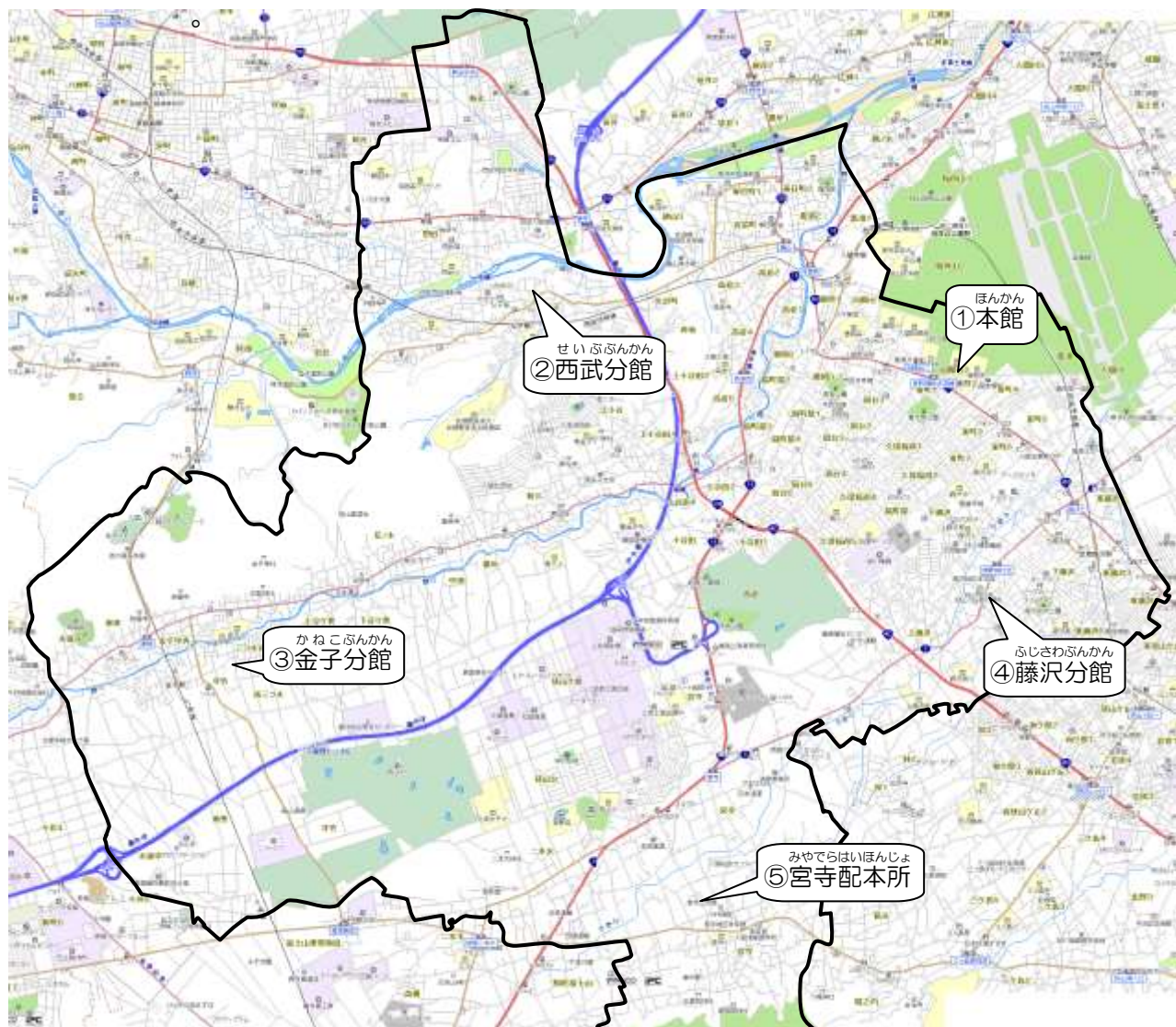


いるましりつとしょかん
—入間市立図書館—
きょうりょく いるまはくぶつかん
協力・入間市博物館

いるまし しりつとしょかん
いま、入間市には5つの市立図書館があります。

- ①本館 (産業文化センター内)
- ②西武分館
- ③金子分館 (金子支所・金子公民館といっしょのたてものです。)
- ④藤沢分館 (藤沢支所・藤沢公民館といっしょのたてものです。)
- ⑤宮寺配本所 (宮寺公民館内)

いどうとしょかん ほん
そのほか、移動図書館(本の
じどうしゃ しな
のせた自動車)が市内をま
わり、図書館からはなれた
としょかん
ところにすむ人たちに、本
かしたし へんきやく
の貸出・返却などをしてい
ます。



としょかん 図書館むかしむかし



としょかん アッシリアのニネヴェの図書館

きげんぜん ねん
紀元前650年ごろ、アッシリアという国
のおう としょ しゅうしゅう ねっしん
の王さまは図書の収集に熱心で、ニネ
ヴェの町の王宮に2万点をこえる図書をあ
つめていました。これらの図書は、粘土板に
そのころの文字(くさび形文字)が書かれた
もので、なんらかの基準によって分類され
てならべられていたことが調査によってわ
かりました。

としょかん エジプトのアレクサンドリアの図書館

きげんぜん せいぎ
紀元前3~4世紀ごろ、エジプトのプトレ
マイオス王朝の王さまは、アレクサンドリ
アの町に蔵書数が40~70万点ともいわ
れている大きな図書館をつくりました。
ここにおさめられていた図書はパピルスと
いう植物でつくられた巻きものに書かれ
たものです。
ここでは、図書の目録もつくられていたよ
うです。

にほん としょかん 日本の図書館

ならじだい くに こうぶんしょ きょう ほんかん
奈良時代に、国の公文書やお経などを保管するために「図書寮」という役所がつくら
れました。
また、そのころ知識人のなかには、自分の蔵書をほかの人が利用できるように公開し
た「文庫」をひらく人もあらわれました。
ぶし じだい ぶし かなざわぶんこ かまくらじだい あしかがっこう ない ぶんこ むろまち
武士の時代になると、武士のために「金沢文庫」(鎌倉時代)、「足利学校」内の文庫(室町
時代)などがつくられました。けれど、いずれもかぎられた人たちしか利用できな
いものでした。
そのため、明治時代になると西洋の文化をとりいれて、明治5年(1872)、東京の
ゆしま しよせきかん としょかん ゆうりょう
湯島に「書籍館」という図書館がつくられ、有料ではありましたが、だれでも利用す
ることができるようになりました。
その後、各地でいろいろな図書館がつくられました。そのなかには無料で使える図書館
もありましたが、公立図書館の利用を無料とすることが正式に定められたのは第二次
せかいたいせんご
世界大戦後のことです。

いるましりつとしょかん
入間市立図書館のあゆみ

いまのような図書館が、さいしょからあったわけではありません。
すこしずつ整備されて、今のような図書館になりました。



いるましりつとしょかん・ニュース

しょうわ ねん がつついたち
昭和41年(1966)4月1日

祝

さいしょの図書館たんじょう!



しょうわ ねん ぶさしまち
昭和31年(1956)にできた武蔵町が
しょうわ ねん がつついたち
昭和41年(1966)11月1日に「市」
になり、名前も「入間市」とあらためられる
ことになりました。そこで それにあわせて
図書館もつくられることになり、昭和41年
(1966)4月1日に、さいしょの図書館
ができました。



41年 旧市庁舎(一部)

↑ そのころの市役所(一部)

↑「いるま(市制施行25周年記念要覧)」より

ばしょ やくば ぶさしまちやくば いるましくしよ しきちない づく
場所は役場(そのころは武蔵町役場、のち入間市役所となります)の敷地内で、プレハブ造り

たても の 建物でした。この場所は敷地も狭く、また
たても の 建物も老朽化してきたため、このあと市役所
や図書館は別の場所へ移転することとなりました。

その準備のため、この最初の図書館は昭和
47年(1972)3月に閉館しました。



こくどう 16号

いるましえき 入間市駅

かすみかわ 霞川

まるひろ 百貨店

とよおかこうこう 豊岡高校

この場所に、武蔵町
役場(のち入間市役
所)がありました。
最初の図書館も、同
じ敷地内にありまし
た。

いるましりつとしょかん・ニュース

しょうわ ねん がつ 日にち
昭和48年(1973)5月16日



↑「市報いるま」

しょうわ ねん がつついたち
昭和48年5月1日号より



ちゅうおうこうみんかん かい きた ぶぶん みぎ
中央公民館2階の北がわ部分(右がわ)
がそのころの図書館だったところです。

この図書館も、約10年たち、
また別の場所へ移ることとなりました。
その準備のために昭和59年(1984)10月に閉館しました。

さんこう した しりょう ほう
参考にした資料は、45号にまとめたのせます。

あわせて、ちゅうおうこうみんかんに
図書館もひっこし、
あらたにオープン!

～ そのころの図書館 ～

- ひとり2冊まで、1週間貸し出し
します。
- 月曜日が休館日で日曜日は正午まで
の開館となります。
- 返却期限をすぎた人にはとくそくを
おこなっていますが、年2回とくそ
くをうけるとしばらく「貸し出し
停止」になります。

さて、つぎの

図書館はいずこに?



どんなところ？ぼくのまち

No. 45 入間市立図書館のあゆみ (2)



いるましりつとしょかん
—入間市立図書館—
きょうりょく いるまはくぶつかん
協力・入間市博物館



このあと、図書館の数も仕事もどんどん増えていきます。



ねん年	ぶん分 かん館	あたらしいサービス
しょうわねん 昭和61年 (1986)	がつついたち 8月1日 みやでらこうみんかん かいみやでら 宮寺公民館の2階に宮寺 はいほんじょ かいせつ 配本所が開設。	がつついたち 9月1日から カセットテープの貸し出しをはじめる。
しょうわねん 昭和63年 (1988)		がつついたち 5月1日から コンパクトディスク (CD) の貸し出しをはじめる。
へいせいねん 平成元年 (1989)		がつついたち 4月1日から • 美術作品 (複製絵画) の貸し出しをはじめる。 • 視聴覚ライブラリーが図書館に移される。
へいせいねん 平成5年 (1993)	がつようか 5月8日 せいぶぶんかん かいかん 西武分館が開設。	<p>16ミリフィルム、上映用DVD の貸出等を行っています。現在は 西武分館で行っています。</p> <p>けんない ほんめ 県内で3番目</p>
へいせいねん 平成6年 (1994)	がつか 7月14日 かねこぶんかん かいかん 金子分館が開設。	
へいせいねん 平成7年 (1995)		がつついたち 10月1日から ところざわし さやまし はんのうし いるまし し しりつとしょかん 所沢市・狭山市・飯能市・入間市の4市の市立図書館の そうごりよう 相互利用がはじまり、ほかの3市の図書館も利用でき るようになる。
へいせいねん 平成11年 (1999)		がつついたち 6月1日からコンピュータ・システムが新しくなる。 ※それにより7月1日から、図書館にある資料をイン ターネットで調べられるようになる。
へいせいねん 平成12年 (2000)		がつついたち 6月1日から としょかん ほん 図書館にある本をインターネットで予約できるよう なる。
へいせいねん 平成13年 (2001)	がつか 4月14日 ふじさわぶんかん かいかん 藤沢分館が開設。	ふじさわししょ 藤沢支所、藤沢公民館と同じ建物です。
へいせいねん 平成20年 (2008)		DVDの貸出を始める。自然科学、世界遺産、名作、 こどもむ 子供向けのアニメなど幅広くあります。

いるましりつとしょかん・ニュース!!

=== いるましりつとしょかん・ニュース === しょうわねん 昭和60年(1985)4月11日 ===

産業文化センター内に、図書館、3度めのオープン!
現在の場所です。これが現在の本館です。

この開館のときから、本の貸し出し・返却や資料の管理などをコンピュータで行うようになりました。

そのため、図書館の本や利用者カードなどには、ぜんぶ「バーコード」がはられました。

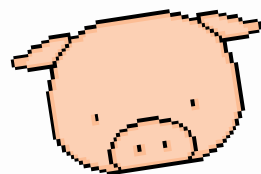
利用者カードに
ついてるバーコード
おかしな
バーコードリーダは
パンク170!

おかしな
バーコードリーダは
パンク170!

本に
ついてる
バーコード

館内におはなしコーナーが
つくられ、定期的に「よみ
かかせ」などの行事も
はじまりました。

「よみかかせ」のじかんには
えほんやがみしばいを
よみます。



数字でみる入間市立図書館のあゆみ

「統計いるま」と「図書館要覧」より

	入間市の人口	1年間の利用者数	蔵書数 (AV資料・ 雑誌・をのぞく)	1年間の貸出冊数
さいしょの図書館のころ (むかしの市役所のとなり) 【1970年】	65,656人	12,864人	6,988冊	4,717冊
2ばんめの図書館のころ (中央公民館内) 【1975年】	84,343人	14,809人	14,719冊	24,508冊
いまの本館ができたころ (産業文化センター内) 【1985年】	118,364人	141,004人	72,739冊	366,576冊
平成25年度 【2013年】	150,010人	286,884人	529,551冊	932,400冊

約40年の間に

入間市の人口は約2倍

図書館の本の数は約75倍



図書館に来たのべ人数は、約23倍

図書館で借りられた本の

のべ冊数は、約204倍!

ひゃ〜

44・45号で参考にした資料

「調べ学習にやくだつ図書館シリーズ①図書館ってなんだろう」(笠原良郎 著 ポプラ社)

「社会科はじめて大百科②まちのなか」(早野美智代 文 ポプラ社)

「くらしをまもる・くらしをささえる②0図書館」(秋山滋 文 岩崎書店)

「世界大百科事典」(下中直人 編 平凡社)「日本大百科全書」(相賀徹夫 編 小学館)

「統計いるま(入間市統計書)(入間市)(70・72・75・77・79・81・昭和58・昭和61・昭和62・平成元年・平成3・平成5・平成7・平成9・平成11)

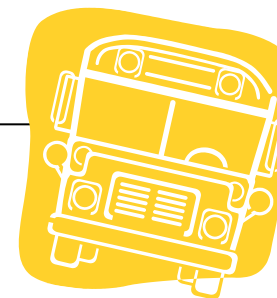
「図書館要覧 平成12年度」(入間市立図書館)「いるま市勢要覧(入間市制施行25周年記念市勢要覧)(入間市)

「市報いるま」No. 203・268・376・623・742(入間市)「いるまの図書館」(入間市立図書館)



みたことあるかな?

移動図書館やまばと号



移動図書館とは、自動車に図書館の資料をのせたものです。

図書館から遠い場所を定期的にまわって、本の貸出や返却をします。

入間市の移動図書館「やまばと号」は昭和51年(1976)から市内の巡回を始めました。

「市報いるま」No.623より



それ以前は1960年代から、埼玉県の移動図書館車「むさしの号」が入間市内にも巡回にきていました。

これは、入間市で「やまばと号」の巡回をはじめたことにより、来なくなりしました。

「やまばと号」も昭和58年(1983)3月には、2代め「やまばと号」へと自動車がかわり、平成6年(1994)1月に新しくなった3代め「やまばと号」が、現在使われているものです。

これは初代の「やまばと号」です。



これが、今使われているものです。

「やまばと号」にのせられる本の冊数

初代	やまばと号	2,300冊
2代め	やまばと号	2,800冊
3代め	やまばと号	2,900冊
4代め	やまばと号	3,000冊